戦後70周年特集
平和について考えよう

総務課広報情報係　☎㉕1114

1941年に日本軍がアメリカ合衆国のハワイ真珠湾を攻撃して始まった太平洋戦争は、約4年後、日本の降伏により終わりを迎えました。この戦争で多くの尊い命が犠牲となり、その反省の上に日本は憲法で戦争を放棄し、不戦を誓いました。しかし、今もなお世界各地では戦争や紛争が無数に存在し、多くの尊い命が失われ続けています。

太平洋戦争から70年の歳月が経ち、戦争を経験したかたの多くは亡くなられ、戦争を知る人が少なくなっています。戦争を二度と繰り返すことのないよう、私たちは次の世代へ語り継いでいかなければなりません。

8月15日終戦の日、戦没者を追悼するとともに、平和について考えてみませんか。

今回は、戦後70周年特集として、戦地となったフィリピンで数々の運命に翻弄されながら、九死に一生を得て無事に生還された安楽島町の寺田文吉さん（90歳）に戦争の体験を聞かせていただきました。

安楽島町 寺田 文吉（ぶんきち）さん

18歳で志願

当時、政府は若い働き手を工場へ徴用していました。私も大阪にある飛行機などの材料を造っている会社で働くことになり、飛行機などの材料を作るためのアルミ合金をプレスする仕事に就きました。高温でドロドロに溶けたアルミを3千トンの炉から取り出し、型へ流していく作業でした。作業中にアルミが足に掛かり、片足をなくした人もいたそうです。こんな危険な仕事でしたので、できれば辞めたかったのですが、国に徴用されているので嫌とは言えませんでした。

そこで同じ国に奉公するのであれば、兵隊に志願しようと決意し、親を説得しました。ただ両親は、私が長男で息子1人でしたので、怒って大反対しましたが、私の意思に負けて許してくれました。後で両親は、「あの子を戦地へやってどうするんだ」と親戚から責められたそうです。

神島村から志願した3人のうち私1人が合格し、昭和19年1月10日に19歳で入隊しました。

戦地フィリピンへ

広島の陸軍軍隊集合所へ入隊した私は、旅館住まいで訓練をしながらフィリピンへ行く船を待っていました。数十日の訓練の後にフィリピンへ向け出発しましたが、日本からは太平洋をまっすぐ通ると1週間もかからないところ、アメリカ軍に攻撃されてしまうので、東シナ海から大回りをして行きました。2月10日夜にフィリピンのマニラ港へ入港し、翌日上陸しました。

2月11日は紀元節と言い、国が始まった日を祝って船で赤飯を炊いてくれたのを今でも覚えています。

私たちより1年遅れて来た船は次々とアメリカ軍に攻撃されて沈められ、日本を出た30隻の船のうち、10隻くらいしか入港してこないこともありました。

セブ島リロアンで教育

フィリピンに着くとすぐ日本の基地があるセブ島のリロアンという町へ行きました。船舶工兵1642部隊に補充兵として私を含めた380人の新兵が入隊し、3か月間の教育を受けました。学校を出るとセブ島の隣にあるレイテ島への兵員輸送や飛行場建設のための資材などを運搬する任務にあたりました。

このレイテ島は、セブ島からは伊良湖と神島くらいの距離に位置し、日本が飛行場を建設しようとしていたことからアメリカ軍の標的となり、後に激戦地となった場所です。

船舶工兵として任務

セブ島へ来てから約半年後に、マニラ港へ向かいましたが、アメリカ軍の爆撃を受けて使えなくなっていたことから、北サンフェルナンド港で船舶工兵の任務にあたることとなりました。

船舶工兵とは、平時は日本から来る船の連絡を無線で受け、船から荷物などを陸揚げし、戦闘になると港から港へ兵を運んで敵前上陸させるのが主な仕事でした。

運命の分かれ道

レイテ島の戦闘が激しくなってくると、船舶が足りなくなり、北サンフェルナンド港からレイテ島へ向けて約50隻もの船団が出発しました。私もその船団のガソリンエンジンを積んだ木船に乗っていました。しかし、この船は音がうるさく夜襲などに使えないなどの理由で、私たちは元の任務に戻るようにとの命令を受け、マニラ沖で5～6隻が引き返しました。このときレイテ島に行った仲間は誰1人生きて帰ってくることはありませんでした。私は幸運だったと思います。

決死の覚悟で

昭和20年1月2日、部隊で正月の餅つきをしていると、アメリカ軍の軍艦が港いっぱいに並んで砲撃をしてきました。艦砲射撃を受けた後は、上陸することが予想されていました。そこで中隊長が私に10人の部下をくれて、敵の上陸を見届けてから自分たちの船が相手に使われないよう船を焼けという命令を下しました。敵が上陸すると船が使えなくなり、これで最後になるかもしれないと決死の覚悟で海岸へと向かいました。また銃砲撃が激しくなることに備え、身の安全を確保できるような穴を掘りながら進みました。

海岸近くまで行くと、弾は部隊がある街の方へ落ち、私たちがいたところは少し離れていたので弾は飛んできませんでした。夕方になっても沖に並んで砲撃しているだけで、あちこちには家くらいの大きな穴が空いていました。砲撃が終わり、上陸してこないので部隊へ戻ると、誰もいなく、部隊は別の場所へ移っていました。

私たちのいた港には多くの守備兵が配置されていたことから、アメリカ軍が別の場所を上陸地に選んだため、ここでも私は命拾いをしました。

戦争に子どもを送りたくない

この戦争で、約50万人もの人間がフィリピンの土になってしまいました。私は九死に一生を得て、日本に帰ってくることができましたが、彼らは帰ってはきません。

国には、国土の防衛はしっかりとしてほしいですが、絶対日本から外へ出て戦闘しないことを徹底してほしいと思います。

子どもを戦地に送りたくはありません。戦争は大反対です。

戦後70年…国民の大半が戦争の悲劇を知らずに育った世代である今、軍靴の音が聞こえ近づいてくるような昨今ではありますが、父親をはじめ親族を犠牲にした私たち遺族は、くる年もくる年も追悼の辞の中で「不戦の誓いを」を約束することによってのみ戦没者との深いきずなを結び合ってきました。

これからの世代交代により、風化しつつある戦争の悲惨さを子々孫々に語り継ぎ、不戦の誓いを新たにしていくことが私たち「遺族会」の使命であると思います。

鳥羽市遺族会会長　坂倉紀男

鳥羽市戦没者追悼式

とき　10月7日（水）午前10時～

ところ　市民文化会館・大ホール

鳥羽の戦没者数　（人）

地区		戦没者数
鳥羽町	岩崎町	16
	本町	29
	大里	29
	錦町	36
	横町	11
	中之郷	21
	藤之郷	18
	奥谷	13
	赤崎	8
	小浜	62
	堅神	21
	坂手	70
	小計	334
加茂村	船津	30
	安楽島	24
	岩倉	15
	河内	31
	松尾	42

地区		戦没者数
加茂村	白木	12
	小計	154
鏡浦村	今浦	26
	本浦	39
	石鏡	70
	小計	135
長岡村	相差	117
	国崎	41
	畔蛸	10
	堅子	21
	千賀	7
	小計	196
菅島村		60
桃取村		62
答志村		154
神島村		65
総計		1,160

出典：鳥羽町は「戦没者遺族名簿」（昭和33年6月）、その他は昭和62年の鳥羽遺族会調査による。

終戦から70年 鳥羽に見る戦争展

市立図書館 ☎㉖4555

市立図書館では、安楽島町の加布良古にあった特攻艇「震洋」の基地のジオラマや鳥羽に残っている遺品の展示を行っています。また「原爆と人間展」のパネル展示も行っています。

ぜひお越しください。

期間　8月30日(日)まで